

聚楽第跡

- 天下人の象徴 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

「洛中・洛外」という言葉があります。室町時代に成立した言葉ですが、一目瞭然になるのは、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉が天正19年(1591)に総延長22.5kmにも及ぶ長大な土塁と濠(堀)を築いてからです。当時は、洛中総構・京惣堀・京中惣ほり、などと呼ばれていましたが、のちに「御土居」と呼ばれるようになります。

この御土居で囲まれた洛中の中心、かつて平安宮の内裏のあった場所に「聚楽第」と呼ばれた城郭が存在しました。

聚楽第は、天正10年(1582)6月の本能寺の変で織田信長が倒れてから4年を経た天正14年(1586)2月21日に秀吉によって築城され、翌、天正15年(1587)年9月13日に完成します。このわずか4年の間に、秀吉は信長の一方面軍司令官から天下人に上り詰めました。

彼は、本能寺の変の直後にいち早く明智光秀を倒し、ライバルである柴田勝家を滅ぼした後、徳川家康をも朝廷の権威を利用して屈服させることに成功します。関白に就任した彼は、四国平定もすませ、いよいよ残すは九州、関東、そして東北の一部を制圧するだけとなりました。まさに、飛ぶ鳥を落とす勢いの天下人として、朝廷との結びつきを強めた時期と、この聚楽第の築城が重なります。

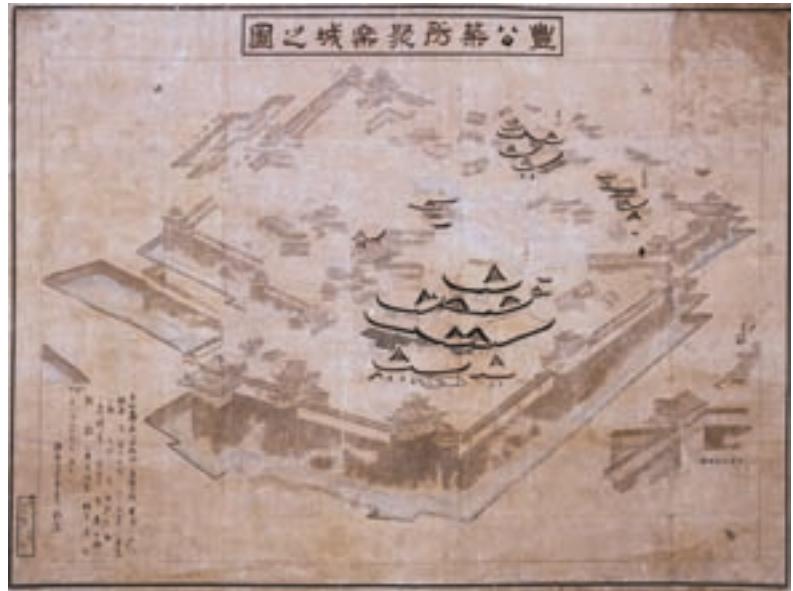


図1 『豊公築所聚楽城之図』聚楽教育会蔵

聚楽第に比べると、軍事的な意味合いや経済的な重要度では大坂城の機能や立地がはるかに優れています。しかし、秀吉にとって、京に天下人の象徴たる城を築き、そこに住むこと自体に意味があったと考えられます。事実、完成するかしないかといった時期に、母の大政所、正室の北政所とともに大坂城から移り住み政務をとるようになります。また、武家屋敷の再編や全国の大名の妻女を京に住まわせるなど、聚楽第を中心とした都市計画を進めていきます。

後に、甥で関白になる秀次に譲られるこの城は、文禄4年(1595)7月8日の秀次失脚にともない破却されます。しかし、存続した9年間に、2度の天皇の行幸や朝鮮やインド副王の使節を迎え入れる

など、内政・外交の舞台として重要な機能を果たし続けました。

それでは、聚楽第はどのような姿をしていたのでしょうか。この城については、後陽成天皇の行幸の様子を記した『聚楽第行幸記』、豊臣秀次の側近であった駒井重勝により書かれた『駒井日記』、寛永元年(1624)頃に作成された



写真1 聚楽第の石垣(東から)

『京都図屏風』などから、内郭と外郭の二重構造になっていたと考えられます。内郭は、本丸・南二之丸・北之丸・西之丸の四つからなります。中でも本丸には、南・北・西の3箇所に門があり、金箔瓦で飾った天守閣や隅櫓、大広間、梅雨の井、庭園などがありました。南二之丸にも門があったこともわかっています。また、三井家本『聚楽第図』や、これを元に描かれた聚楽教育会所蔵『豊公築所聚楽城之図』には、外郭東側に巨大な櫓門が描かれています(図1)。

近年の埋蔵文化財調査の進展にともない、わずかですが聚楽第の実像がつかめるようになってきました。

内郭の中心に位置する本丸部分では、推定幅26m・深さ8.4mの濠跡をみつけることができました。この濠跡は本丸の東側にあった濠と考えられ、大量の金箔瓦が出土しました。

また、本丸南側の濠と西之丸南側の濠の様相も近年明らかになりつつあります。昭和39年に実施された坤高町の図子(浄福寺通の一本東の通り)の立会調査などにより、幅43.5m・深さ約10mの濠が存在することがわかりました。

他にも、南二之丸の南側にあった濠跡や、本丸西側の濠跡も徐々に様相が明らかになりつつあります。その中でも、平成9年の北之丸の北側にあった濠跡の調査は特筆すべきものでした。聚楽第の石垣を初めて見つけることができたのです(写真1)。

見つかった石垣の北側、栄町と



図2 聚楽第跡の推定範囲と調査位置

鏡石町の町境沿いに2.5m余りの段差が東西に連なっています。この段差から南に13m離れた場所で、石垣石を抜き取った穴と4個の石材が見つかりました。大きさは50cm~100cm程度で、自然石が用いられていました。

これらの成果をもとに聚楽第の範囲を復元してみました(図2)。

北は一条通の北側にある栄町と鏡石町の町境、東は大宮通、南は下立売通、そして西は土屋通に囲まれた範囲に復元しました。本丸の四辺の合計は約1,130m、同じく南二之丸は596m、北之丸は348m、西之丸は268mとなります。

南二之丸の大きさが『駒井日記』の記述に比べ1.6倍大きいことを除けば、本丸や西之丸、北之丸は

『駒井日記』に記された規模の0.9倍~1.2倍の範囲に収まっており、復元案の信頼性が高いことがわかります。ただし、天守閣を初めとする高層建築や庭園・井戸などは全く見つかっておらず、秀吉の命じた解体撤去がいかにもすまじいものであったのかがわかります。

一方、外郭については謎が多く、現在、松林寺のある新出水通南側の窪地を濠跡とする以外、不明確なままで、今後の調査の進展が期待されます。そして、大宮通よりもさらに東側にあったと考えられる巨大な櫓門の位置を特定することも重要です。西陣の町の地下には、まだまだ聚楽第の遺構が眠っているかもしれません。

(京都市文化財保護課 馬瀬智光)